

## 名田庄村納田終の薬師堂 (旧増福寺薬師堂)

吉 田 純 一\*・木 村 悠\*\*・小 酒 徹 也\*\*

### The *Yakushido* in the Nutaoi District of Natasyo Village

Junichi Yoshida, Yuu Kimura and Tetsuya Kosake

This paper is a report of the investigation on the *Yakushido* of the former Zofukuzi temple in the Nutaoi district of Natasyo village, Fukui prefecture. It seems that the *Yakushido* was built in the early Edo era. It is one of the valuable historic-architectures in Fukui prefecture. It became clear the original plan and the original structure of the *Yakushido* in this paper.

#### 1. 薬師堂の略史

本稿は福井県教育庁文化課の依頼を受けて、平成 13 年 8 月に実施した名田庄村納田終の薬師堂に関する建築調査報告である。この建築はもとは増福寺の薬師堂であった。『名田庄村誌』<sup>(1)</sup>によると、増福寺は文治 3 年 (1187) に僧石王丸によって湯の森に開創されたと伝わる曹洞宗の寺院で、俗に温泉寺とも呼ばれていた。その後、弘安 3 年 (1280) 火災で堂宇が全焼したために明神の森三上に新たに堂宇をつくり、玉泉坊と称した。ところが、永禄年間 (1558 ~ 1569) に再び焼失し、堂森の奥仏谷 (現在地) に移して再建されたという。

現在の薬師堂は、棟札の写しがあって、永禄の火災から 50 年ほど後の元和 3 年 (1617) につくられたと伝わっている<sup>(2)</sup>。しかし、根拠となった棟札写は所在不明で、現在は確認できない。その後、宝暦年間 (1750 ~ 64) の修理記録があるというが、この記録の詳細についても不明である<sup>(3)</sup>。玉泉坊は明治の廃仏毀釈で廃寺となったようで、それ以降、納田終地区が管理するようになった。その後の変遷についても不明であるが、昭和 17 年に内陣で失火があり、柱など一部の部材が取り替えられている<sup>(4)</sup>。

ただし、屋根は現在も茅葺きであり、柱などは木太く、風食が甚大で、建築時期の古さを漂わせている。また、外回りに壁や建具がなく、いたって開放的な建築であるが、古い柱にみられる多くの痕跡から当初の状態や間取り、構造などの変遷がある程度推定できる。その上、建立時期は江戸初期まで遡る可能性が高く、由来や歴史については不明な点が多いものの、福井県内に現存する貴重な歴史的建築のひとつといえる。ちなみにこの薬師堂は昭和 47 年 10 月に名田庄村の文化財に指定されている。

---

\* 建設工学科 建築学専攻 \*\* 建設工学専攻 大学院生

## 2. 薬師堂の建築形式 (図1 現状平面図 参照)

### 1) 平面と内部構成

薬師堂の現状平面は図1に示した通りである。桁行5間、梁間4間、一重入母屋造、茅葺き、平入りの建築で、四周に縁がまわっている(写真1)。正面には1間の向拝(金属板葺き)がつき、3級の木階が設けられている(写真3)。後方の中央に3間×2間の内陣をとり、前方の5間×2間と内陣の両脇を外陣としている。内陣は板戸や板壁、格子で閉ざされているが、外回りは内陣の背面にあたる北側の中央3間分以外は、建具や壁がなく、吹き放し、開放のままである。外陣内部にも間仕切りはなく、いたって開放的なお堂である。

内陣は桁行の中央列に2本の丸柱(来迎柱)を立て、それより後方1間が須弥壇で、中央間に薬師像と日光・月光菩薩を安置していた入母屋厨子があり(写真5)、左右脇間には十二神将像が置かれている。これら仏像は京の仏師に造らせたもので、元龜3年(1573)10月17日付けの買い取りに関わる文書も残されていて<sup>(5)</sup>、歴史的にも興味深い、貴重な仏像である。なお、薬師像と日光・月光菩薩の3体は現在は防犯のために別のところに移管されている。

内陣の天井は根太天井で、入母屋厨子が置かれている中央間だけ一段高くなっている。周囲の柱間装置は、正面3間が腰板壁の上に格子を嵌め込み、両脇は前方1間が引き違い板戸2枚立て、後方1間は袖壁付きの片引きの板戸1枚立てとし、背面の3間はすべて板壁である。

一方、外陣は前方の桁行5間の左右両端から1間内側の柱列の中央にそれぞれ1本ずつ独立した丸柱がたっている(写真2)。また、内陣の左右両側の1間×2間分との境にも建具などはなく、ここも外陣の両端から奥につながる空間になっている。すなわち、外陣は内陣をコの字型に取り巻くように設けられている<sup>(6)</sup>。天井は向拝から内陣へ向かう中央間1間分だけが根太天井で、それ以外は天井はなく、小屋裏がそのままみえている。

なお、内陣、外陣ともに板床になっているが、本来は畳敷きで、内陣の東側に畳が積まれている。現在でもご開帳などの際には畳を敷き詰めているという。

### 2) 構造形式 (図2 現状断面図 参照)

この堂は石積みの低い基壇上にたつ。3間×2間の母屋を丸柱とし、周囲に廻る1間幅の庇を角柱とするが、丸柱も角柱もすべて礎石立てである。軸部は縁長押と内法長押で固められ、母屋の丸柱と庇の側柱は原則として内法貫でつながれているが、外陣の中央部の2柱列は内陣柱から正面側柱に虹梁を架け渡して柱を省略している。母屋柱、側柱はほぼ同じ高さで、これら柱天の桁行にまず梁を渡し、その上に直交して梁行の梁を架け、梁組を形成している。小屋組は小屋束を用いる棟束形式で、まず、側柱の位置で2尺ほど上げて小屋梁を架け、さらにもう一段小屋梁を渡し、その上に棟束をたてて棟木を支えている(写真4)。そして棟木から縁柱の天に渡された桁に丸太状の垂木を渡して小屋組がつくられている。束を用いて棟木を支える、このような棟束形式の小屋組は当地方の近世民家に広くみられる<sup>(7)</sup>。

### 3) 柱について

側廻りの柱はすべて角柱で、太さは8寸前後(約24cm)、面は大きく約2cmあって、面取は

1/12 になる。在種は桧材（へ七のみケヤキ）で、仕上げは当初柱とみられるものは風食が甚だしいためにわからないが、後補柱はカンナ仕上げである。向拝柱と縁柱も角柱で、太さは約4寸（12 cm）である。丸柱は母屋柱と来迎柱で、ともに太さは約8寸径で、ヤリガンナ仕上げになっている。これらのなかで、当初材の側柱や内陣内の丸柱には多くの痕跡がみられ、外廻りや内陣の当初や中古の改変がうかがえる。

### 3. 復原考察（図3痕跡図、図4推定復原平面図 参照）

#### 1) 当初柱・中古柱・新しい柱

当初の柱はハ列（二～七）、二列（二、三、六、七）とホ列（二、四～七）、ヘ列（四、五）である。これらは風食が甚だしく、痕跡も多い。中古の柱はト七と向拝柱のイ四、イ五で、ロ列、チ列、一列、八列の縁柱もすべて中古とみてよい。ト七柱は当初柱に比べて風食が少なく、痕跡もほとんどない。向拝柱や縁柱は外廻りにあるためにかなり風食がみられる。

新しい柱はホ三とヘ列の二・三・六・七およびト列の三～六である。これらは見た目にも新しく、風食や痕跡もない。ホ三柱は前述したように、昭和17年に内陣のなかで葺仕事をしていた際に発生した火災後に取り替えたという。この火災はボヤ程度であったというが、ほかの柱もこの時あるいはその少し前あたりに取り替えられたものとみられる。

以上のように梁行の背後1間分の周囲に新しい柱が多く、後方1間分に大きな改変が認められる。特にト列には古い柱は1本もなく、当初の状態はわからない。ただし、この列より1間内側にたつ内陣内の柱へ四と柱へ五は背面に八角形の仕上げ跡を残すものの、外に面していたような形跡は認められず、しかも後方に延びていたとみられる繫梁の仕口跡があるから、もともとへ列の背後に庇状の空間がついていたことは疑いない。

#### 2) 内陣の改変

へ四柱とへ五柱は来迎柱で、この両柱の痕跡から当初の須弥壇は、現状よりも1間前方についていたことがわかる。すなわち、へ四柱とへ五柱の相対する面に板壁の溝跡があり、それぞれ前方に延びていた棚板と腰壁および内法板壁の溝跡もみられる（写真6）。つまり、もとはへ四柱とへ五柱は須弥壇の背後両端に位置していた柱で、両柱の間は来迎壁になり、それから前方に仏壇が造り付けになっていたとみてよい。

仮に現在の入母屋厨子をもとの須弥壇に置こうとすると、高さが130cmあるから天井につかえてしまって納まらないことになる。したがって、この厨子は当初からこの堂に安置されていたものではないことがわかる。現在の入母屋厨子は、棟札によって寛政11年（1800）につくられたことが明らかであり<sup>(8)</sup>、へ四柱とへ五柱の前方にあった須弥壇を現状のように1間後方に移したのはこの入母屋厨子の新設された頃とみることができよう。そして現在、へ四柱～へ五柱の上方に架かる虹梁や彫刻木鼻も様式的にみて江戸後期のものと思われ、これらもおそらくこの改造に際して補加されたものと考えることができる。

### 3) 内陣正面の格子構え

現在、内陣正面の3間はいずれも腰板壁に嵌め殺しの格子が入り、外陣境は中世仏堂にみるように閉鎖的である<sup>(9)</sup>。しかし、上記のように古くは須弥壇が前方にあったとなれば、ここに間仕切りがあつては須弥壇の前が狭くなりすぎて、使い勝手が悪い。しかも柱と中敷居などの取り付き仕事もきたなく、これらは後補とみられる。したがって、当初はこの柱列に間仕切りはなかったものと考えられる。現状の腰板壁と格子も取り外し可能で、平成5年の開帳の際には取り払われていた<sup>(10)</sup>。上記のように須弥壇を後方に移動した際、正面の格子構えも補加されたのではないだろうか。

### 4) 外周りの柱間装置の変遷

現在は内陣背面のト三～ト六に板壁があるだけで、これ以外の外回りの各柱間はすべて建具や壁がなく、開放のままである。ところが、外回りの各柱面に残る痕跡(写真7)や鴨居、敷居の仕口跡などから各柱間の当初の形式やその後の改変を類推することができる。以下、順にみてみよう。

#### ①正面中央間(ハ四～ハ五)：当初、両開き扉構え→中古も同→現在、開放

正面中央間ハ四～ハ五の無目敷居にはそれぞれの柱から約23cm内に入った位置に方立てと板壁の痕跡があり、内法長押の下端には扉の軸受けの金具と穴が残っている。この無目敷居と内法長押は当初材とみられることから、正面中央間は当初、両開きの扉2枚立ての構えであったとみることができる。この他に痕跡はないからこの状態から現状の開放へ改変されたとみられる。

#### ②正面脇間(ハ三～ハ四、ハ五～ハ六)：当初、中央間寄りが窓状の開口部、端間寄り不明→中古、板戸2枚引き違い→現在、開放

ハ四柱西面とハ五柱東面には現敷居から約103cmの高さに中敷居の痕跡があり、その下に板壁溝跡が残っている。ところが、それぞれ対応するハ三柱東面とハ六柱西面には腰板壁の溝跡だけで、中敷居の痕跡はない。したがって、当初はそれぞれ中央間寄りに窓状の開口部があったことが推察できるが、端間寄りの方の状態は不明である。そして内法高に鴨居仕口跡があることから中古に建具2枚引き違いに変わり、さらに現状の吹き放しに改造されたことがわかる。

#### ③正面端間(ハ二～ハ三)：当初、半間板壁・半間板戸1枚片引き→中古、板戸2枚引き違い→現在、開放 正面端間(ハ六～ハ七)：当初、板壁→中古、板戸2枚引き違い→現在、開放

正面の西端間ハ二～ハ三は、ハ二柱東面に板壁溝と鴨居仕口跡があり、ハ三柱西面には板壁跡がなく、鴨居仕口跡だけがみられる。したがって、当初はハ二柱寄りの半間が板壁で、ハ三寄り半間は板戸片引きであった可能性があり、その後に板戸2枚引き違い、そして現在の開放へと変わっていったとみられる。一方、東端間ハ六～ハ七はハ六柱、ハ七柱の対応する面に板壁、鴨居仕口跡があるから、当初は板壁で、その後に板戸2枚引き違い、そして現状の開放へと変化していったことがわかる。ただし、そうなると、正面両端間は当初同じ柱間形式でなかったことになり、正面性や対称性を意識する仏堂の性格からみるとやや疑問が残るが、ここでは痕跡を主に想定しておく。

④東側南より第一間（ハ七～二七）：当初、板壁→中古、板戸2枚（1枚は嵌め殺し）→現在、開放

ハ七柱北面と二七柱南面には板壁溝があり、内法に残る鴨居は南寄り半間が突き止め溝になっている。鴨居は中古材とみられるから、この柱間は当初が板壁で、その後板戸2枚立てで1枚が嵌め殺しの状態を経て現状のような開放になったとみられる。

⑤東側南より第二間（二七～ホ七）：当初、半間板壁・半間板戸1枚片引き→現在、開放

二七柱北面に板壁溝跡があり、敷居は2本溝であるが、南寄り半間が突き止めになっている。一方、ホ七柱南面は板壁の溝跡がないことから、当初は南より半間が板壁で、北寄り半間に板戸1枚を片引きで立て、その後板戸2本引き違い（ただし1本は嵌め殺し）となり、さらにそれらを取り払われて開放になったとみられる。

⑥東側南より第三間（ホ七～ヘ七）：当初、板壁？→中古、不明→現在、開放

ホ七柱北面に板壁の溝跡ある。しかし、ヘ二柱は後補の柱であり、この柱間については当初、ホ七柱に板壁がついていたことがわかるだけで、その詳細や中古の状態はわからない。

⑦東側南より第四間（ヘ七～ト七）：当初、中古ともに不明→現在、開放

ヘ七柱、ト七柱ともに新しいため、当初、中古の状態はともに不明である。

⑧西側南より第一間（ハ二～二二）および西側南より第二間（二二～ホ二）：当初、板壁→中古、不明（あるいは板壁）→現在、開放

これら両柱間のそれぞれ向かい合う柱面にはともに板壁の溝跡があり、当初、板壁であったことがわかる。ただし、鴨居の仕口跡や鴨居はみられず、中古も板壁の状態が続き、その後に現状のように開放されたことが考えられる。

⑨西側南より第三間（ホ二～ヘ二）：当初、中古ともに板壁？→現在、開放

当初柱とみられるホ二に板壁溝が残っているだけで、ヘ二柱が新材のために当初の状態は不明である。ただし、ホ二には鴨居の痕跡もないから第一間、第二間と同じように板壁の状態から開放に改変されたと考えられる。

⑩西側南より第四間（ヘ二～ト二）：当初、中古ともに不明→現在、開放

ヘ二柱は新しく、ト二柱は中古材であるために当初の状態はわからない。

⑪背面（ト列）：いずれの柱間も当初、中古、不明→現在、両端間が開放、他は板壁

ト列はすべての柱が新材のため、当初、中古の状態ともに不明である

## 5) 縁、縁柱について

現状は四周に縁がまわり、縁先に1間ごとに柱（縁柱）が立っている。しかし、正面と両側面の縁の幅は約100～110cmあるのに対し、背面の縁幅は91cmでやや狭い。縁柱の礎石も正面と両側面は少し地中に埋めて据えられているが、背面の縁柱の礎石は地表に置かれているだけである。先述のように背面のト列はすべて新しい柱であり、こうした縁の状況からみても背面の縁は当初なかった可能性が強い。

また、縁柱は外に面しているためか、相当風食しているものの、いずれも中古材とみられる。そして、現状は縁柱の天に渡されている桁が垂木を受けているが、正面と両側面には上方にせが

い軒が未使用の状態でそのまま残っている（写真8）。したがって、古くは正面と両側面は梁を側柱から外へ持ち出し、その先端に出桁を通して軒を構成していたことがわかるとともに、現在みられる縁柱が後補材と判断できる。

#### 6) 小屋組と軒形式（図5 推定復原断面図 参照）

小屋組は合掌を用いず、棟束形式になっている。この形式が創建当初まで遡るかどうかはわからないが、当地域の近世茅葺き民家も同じ棟束形式の小屋組を採用している。遅くとも先述のように須弥壇が後方に移動、改変されてからは現在の小屋組が踏襲されているとみられる。そして四周の縁先に縁柱をたて、この柱列に架かる桁が垂木を受ける形式も同じ頃に採り込まれたと考えられる。しかし、上述したように、正面と両側面の縁の上方には現在使われていない出梁・出桁がそのまま残っていることから、以前の軒形式はせがい造りであり、出桁の側面に板溝がみられるから板天井が張られていたこともわかる。

#### 7) 向拝について

向拝の屋根は金属板葺きで、本体の茅屋根とは違和感がある。柱も中古材であり、やはり中古の縁柱と海老虹梁でつながっている。そして海老虹梁の絵様や正面の水引虹梁の木鼻彫刻、板葺股などの形式も明治以降のものとみられる。ただし、この向拝の1間分だけせがい造りの板天井の溝跡がみられないことから現向拝の以前にも、形態は不明であるが、向拝がついていた可能性が強い。

### 4. 薬師堂の建築的意義・価値

以上のように、名田庄村納田終の薬師堂について、建築調査に基づきながら当初の状態やその後の改変について検討してきた。これらの成果を踏まえながら薬師堂の建築時期や当初の状態あるいは建築的意義についてまとめれば以下になる。

- ①建築時期について：元和3年（1617）建立の棟札写があったといい、寛文2年（1662）の鰐口も残っている<sup>(11)</sup>。そして当初材とみられる角柱は、太さが約8寸、面取りも約1/12で大きく、古式である。元和3年の確証はみつからないものの、薬師堂の建築時期が江戸初期まで遡ることは間違いないであろう。
- ②現状は江戸後期の状態：内陣の移動や背面、外回り柱間装置、向拝、縁、小屋組、軒周りなど随所に後の改変が認められるが、当初の平面は図4のように推定できる。そして図1に示す現状のようになったのはおそらく江戸後期とみられる。
- ③茅葺きの寺院建築：県内の国指定あるいは県指定の建造物の中で、茅葺きの寺院建築としては小浜市の飯盛寺本堂（国重文）、美山町の樺八幡神社古拝殿（県指定）があるに過ぎない<sup>(12)</sup>。しかし、江戸時代には社寺建築でも茅葺きが主流であったとみられ、この薬師堂も江戸期の雰囲気や留める福井県内でも数少ない、貴重な遺構といえる。
- ④元龜3年（1572）造立の仏像を安置：当建築の内陣に安置されている本尊の薬師像、日光・月光菩薩像および十二神将像は、元龜3年に京の仏師に依頼してつくられたもので、各像の価格

もわかる。こうした記録は珍しく、しかもその仏像がそのまま現存しているのである(十二神将像の3体は新造という)。こうした仏像を守るお堂としての意義も大である。

⑤地区民の保存に対する熱意：昨今の茅屋根に関しては、茅の入手あるいは茅葺き職人の減少という問題がある。この薬師堂を守っている納田終地区民は、共同で茅を成育し、茅の葺き替えに対処しているという。いわば、今はやりの地域おこしの活動のひとつとしてこの薬師堂をとらえているのである。建造物の文化財となれば、建築的に優れていることはいうまでもないことであろうが、指定に際してはこうした地域の人たちの建築に対する熱意なども考慮すべきであろう。

■謝辞 調査に際しては、県教育庁文化課文化財保護室室長仁科章氏、名田庄村教育長菅原儀平治氏、同村社会教育主事柿本義孝氏ならびに納田終地区の各位には調査の段取りから立ち会いまで大変お世話になった。末尾ながら記して厚く感謝申し上げたい。

## 註

- (1) 名田庄村『名田庄村誌』昭和46年 p 402～404
- (2) 註1掲載『名田庄村誌』および福井県教育委員会『近世社寺建築緊急調査報告書』昭和56年3月 p 144
- (3) 註1、註2と同じ
- (4) 地区の古老のお話による。
- (5) 仏像(薬師像、日光・月光菩薩像、十二神将像)の購入・支払いを示す文書(元龜3年10月17日付)  
「元龜三年壬申二月十二日京へ上申 上村納田終増福寺  
一御本尊并日光月光十二神立作申次第之事 (中略)  
以上合七貫八百文  
元龜三年壬申十月十七日 上村[ ]」
- (6) ただし、内法高さに貫や小壁があり、空間的には分けられている。
- (7) 福井県教育委員会『福井県の民家－民家緊急調査報告書－』昭和44年度 によれば  
小浜西部や若狭西部の若狭Ⅱ型に分類される民家がこの棟束形式の小屋組を採用している。
- (8) 厨子棟札：尖頭型 桧 高さ(頭)73.4 cm、(肩)72.8 cm 幅(肩)17 cm、(底)16 cm 厚1.8 cm  
(表) 寛政十一巳未年  
聖主天中天迦陵頻伽聲 別當 玉泉坊  
哀愍衆生者我等今敬禮 現住吏乗謹言  
長月下四日  
(裏) 大飯郡和田村  
大工 猪兵衛  
施主 松村久郎太夫
- (9) たとえば、明通寺本堂(小浜市)や中山寺本堂(高浜町)などがこの例である。
- (10) 地区の古老からの聞き取りや平成5年ご開帳の際の写真による。
- (11) 鰐口銘：桂又山増福寺 寛文十二年八月吉日
- (12) 福井県教育委員会『図録 福井県の文化財』昭和55年

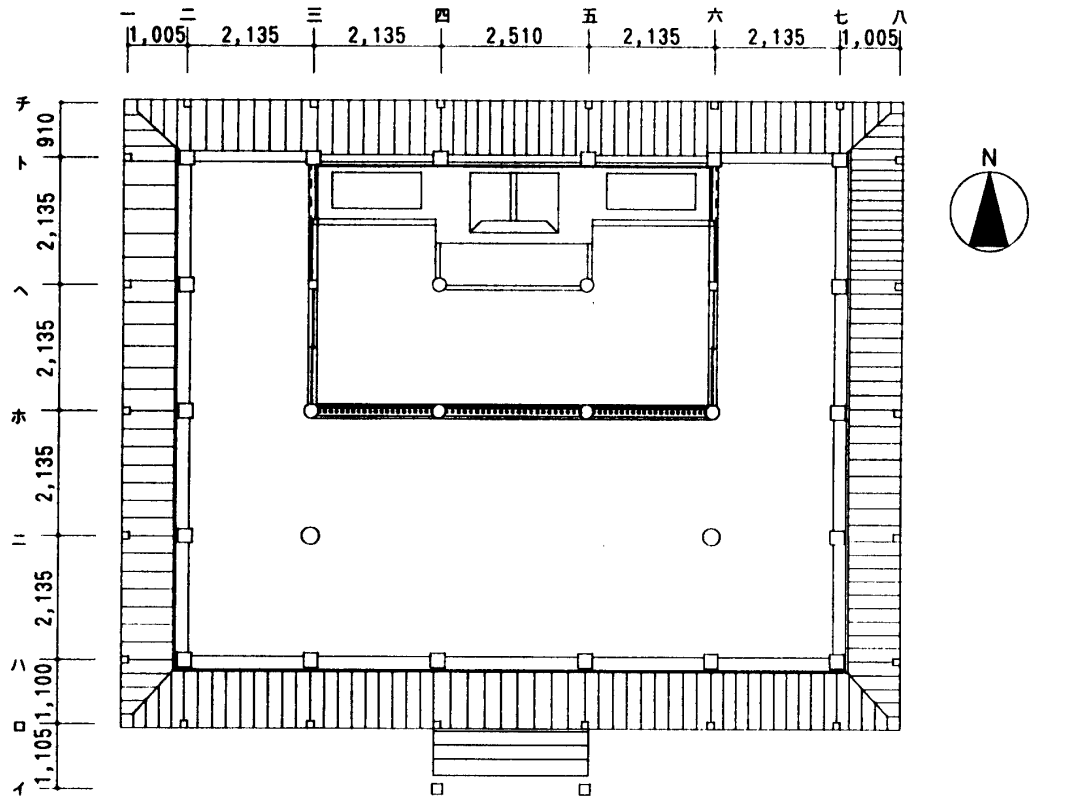


図 1 現状平面図

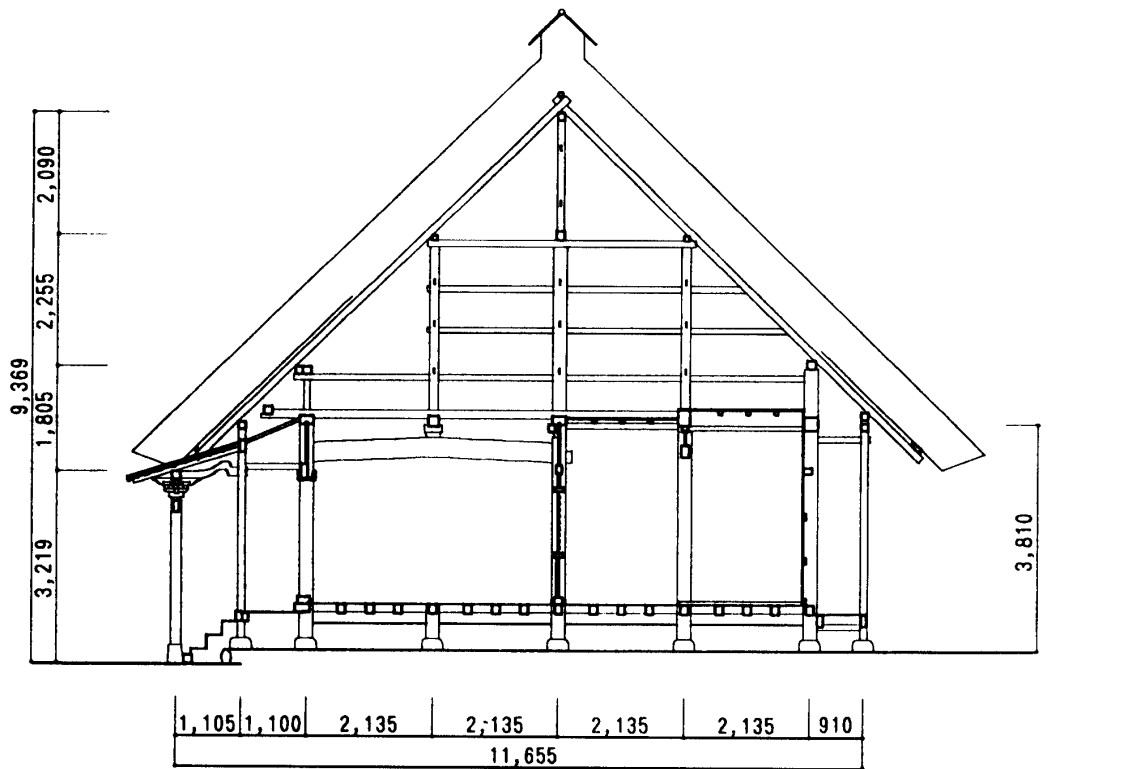


図 2 現状断面図



名田庄村納田終の薬師堂(旧増福寺薬師堂)

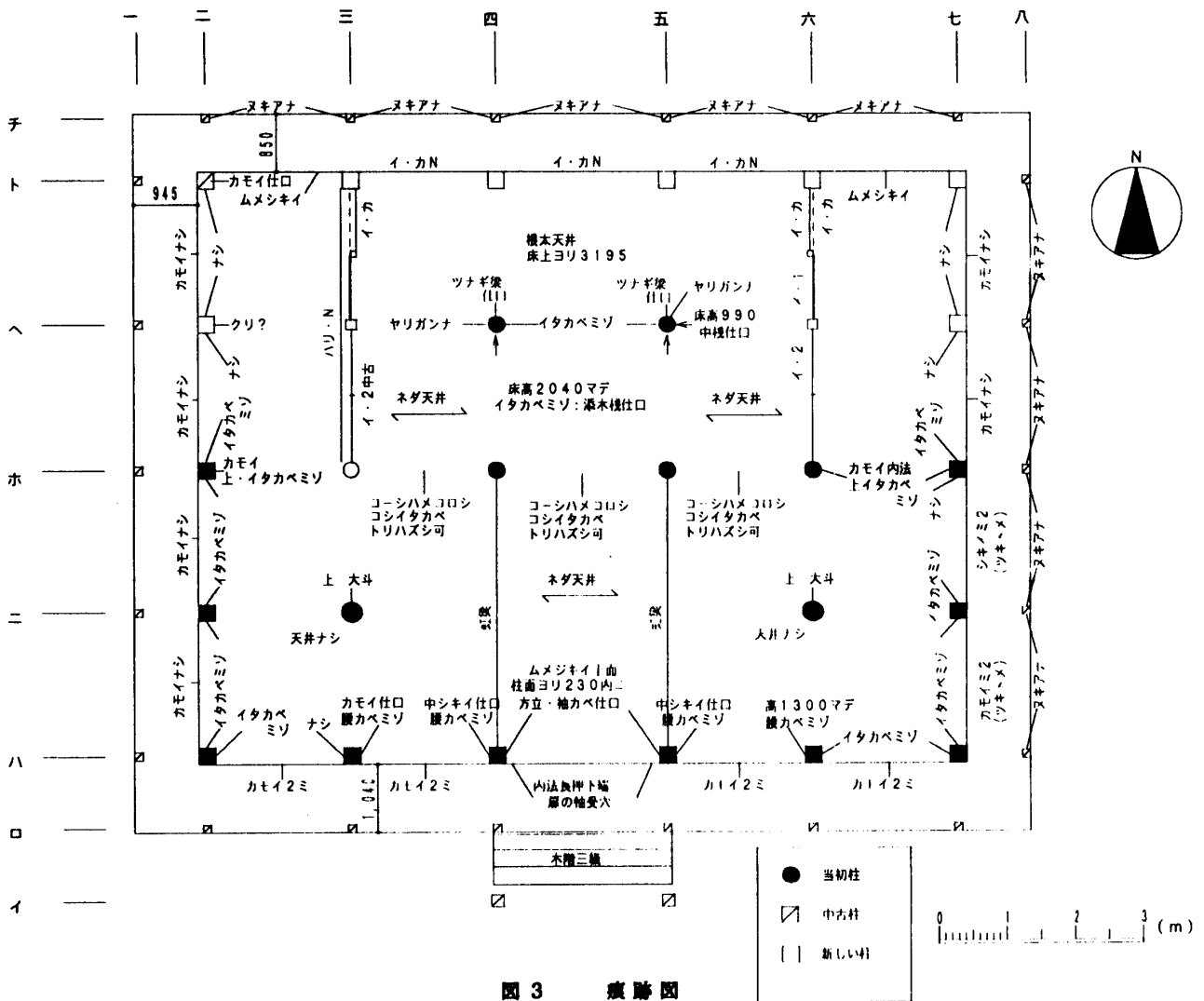


圖 3 痕跡圖

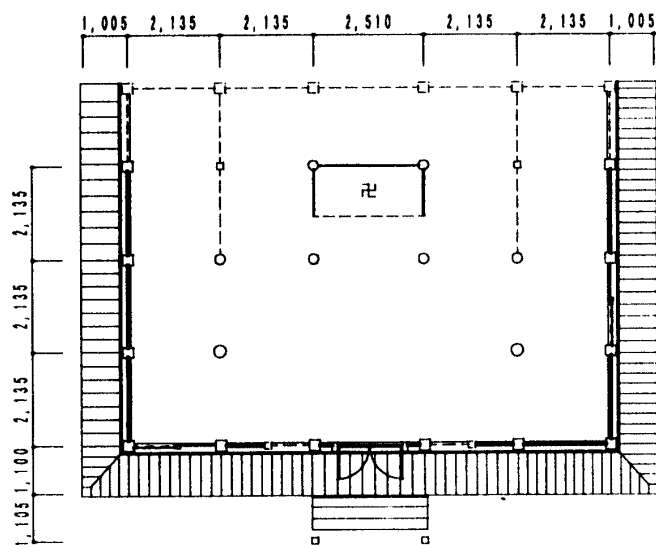


圖 4 推定復原平面圖

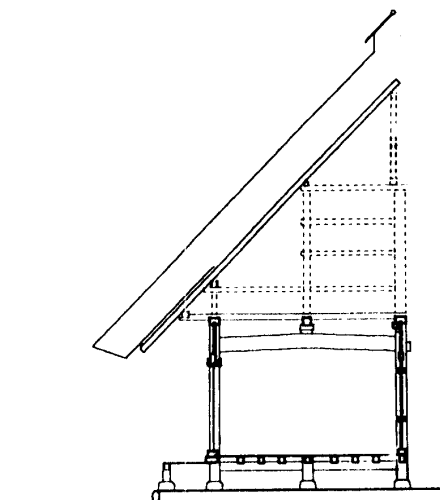


圖 5 推定復原断面図

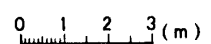




写真1 外観



写真2 内部



写真3 向拝



写真4 小屋組

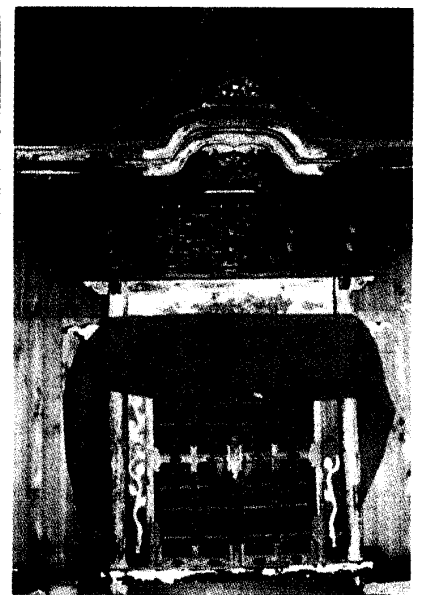


写真5 入母屋厨子



写真6 来迎壁の痕跡



写真7 側柱の痕跡



写真8 軒裏の旧出桁

(平成13年12月4日受理)